

機関番号：12401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520276
 研究課題名（和文） ロシア的主体の系譜 現代ロシア文化の自己表象とその文化史・思想史的相関
 研究課題名（英文） The Genealogy of Russian Self: The Self-Representations of the Contemporary Russian Culture And Their Cultural And Ideological Contexts
 研究代表者
 野中進（NONAKA SUSUMU）
 埼玉大学・教養学部・准教授
 研究者番号：60301090

研究成果の概要（和文）：現代ロシア文化の自己表象に関連して重要な四つの分野、(1) ロシア・ナショナリズム、(2) 大衆文化、(3) 正教思想、(4) 文学の社会的機能、を中心に、定期的な研究および国内外での成果発表を行った。より具体的な分析例としては、現代ロシアにおける文化学役割、アニメ映画、聖者伝の現代的意義などが挙げられる。これらの分析を通じて現代ロシア文化の自己表象の多様性と類型性のある程度明らかにすることができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In terms of the self-representations of the contemporary Russian culture the project has had its main concerns to the following four areas: (1) Russian nationalism, (2) the mass culture, (3) the Orthodox thoughts, (4) the social functions of literature. The project held the periodical seminars specialized in those topics and made several important domestic and international publications. As far as the concrete topics of research are concerned, the project chose the following topics: the role of culturology in Russia, the animation films, the contemporary image of the Orthodox saints and so on. It is considered that the project has made an analysis of the diversity and the main typology of the self-representations of the contemporary Russia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ロシア東欧文学・ロシア現代文化

1. 研究開始当初の背景

近年、経済的発展を軸にロシア社会は活気と自信を取り戻している。そのことは文化状況にも大きな影響を与えており、「ロシアの独自性」をめぐる議論はふたたび活発になっている。ただし純粋に学術的な手法を取っているように見える場合でも、一定の政治的バイアス、思想的立場が規定的であることがしばしばで、そのためかえって社会的な影響力も強い。こうした「ロシアの独自性」に対す

る強い関心はそれ自体フォローすべき社会・文化現象であると同時に、アカデミックな知見に基づいた文化史・思想史的な位置づけを必要としていた。

2. 研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえ、「ロシア的主体への欲望」の現代的現れ方、ならびにその文化史・思想史的系譜の相関関係を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

この研究では、従来、独立別個に進められることの多かった「現代文化の調査」と「文化史研究」を「問題視点の規定」と「歴史的事例による根拠づけ」という批判的方法によって関連させることで、現代文化調査の方法的・理論的洗練とともに、文化史研究の諸問題の現代性を際立たせることが可能となった。

4. 研究成果

本研究で注目した主に四つの分野、(1) ロシア・ナショナリズム、(2) 大衆文化、(3) 正教思想、(4) 文学の社会的機能、を中心として、研究および成果発表を行うことができた。論文発表については、次項に書誌情報を挙げることにし、本項ではそれ以外の研究成果について詳述する。

(1) 2008 年度については以下の通りである：まず、公開型の研究会を三回開いた。「ロシア的主体の系譜」という全体テーマの共有、各研究分野の開拓に益するところが大きかった。

・第一回 9月13日(土) 午後2時半—6時半、於埼玉大学東京ステーションカレッジ、報告者及び報告題目：梅津紀雄「ロシア国歌史～歴史の変遷とその表象するもの」；越野剛「ナロードと戦争：スサーニンの形象について」；野中進「研究プロジェクト「ロシア的主体の系譜 現代ロシア文化の自己表象とその文化史・思想史的相関」について」

・第二回 12月27日(土) 午後2時半—6時半、於東京大学(本郷)、報告者及び報告題目：渡辺圭「現代ロシアに生きる正教会の聖人：列聖制度と不朽体をめぐる奇蹟」；岩本和久氏「フロイトとロシア」；野中進「ロシア文化論はどのようにして可能か」

・第三回 3月14日(土) 午後2時半—6時半、於東京大学(本郷)、報告者及び報告題目：中村唯史「ペテルブルグのトポロジーとロシア的主体：試論」；秋草俊一郎「21世紀のロシア系移民作家と「ロシア性」について」；野中進「クリトウロローギア(文化学)について」。

また、これ以外には、野中(研究代表者)が十月にロシアのユーリエフ・ポーリスキーで開催された国際会議「マリギナリア 2008：文化の周縁とテキストの境界」で報告を行ない、メディアとジェンダー、国民意識の関係について20世紀初頭のロシアの思想家・評論家ローザノフを題材に論じた。研究分担者の貝澤哉は単著『引き裂かれた祝祭』(論創社)を出版した。この十年間、日本のロシア文学研究をリードしてきた著者による初の単著として各方面から注目されている。同じく研究分担者の中村唯史は、ロシア文学にお

ける他者表象の問題に関連して、コーカサス・モチーフについて論じてきたが、その研究成果を他分野や広く読者界に問う「特権的トポスのはじまり：コーカサス表象の原型と「他者の声」について」を発表した。

(2) 2009年度については以下のとおりである：前年度に引き続き、定期的な研究会の開催および国内外の学術会議での成果報告に努めた。研究会(10月31日、12月26日)では、野中進(代表者)、井上徹(協力者)、長谷川章(連携)、ヴァレリー・グレチュコ(協力者)らが報告を行い、活発な討論を行った。また、基盤研究A「ヴォルガ文化圏とその表象をめぐる総合的研究」(代表者：望月哲夫・北海道大学・スラブ研究センター・教授)と合同で、ロシア文化研究合同研修『ヴォルガ／ロシア』(2010年2月20-22日)を開き、地域間・世代間の研究者交流をはかった。これらの研究会を通じて、本項の最初に述べた四つの領域の研究に関して着実な前進を示した。

また、国際会議での成果報告も順調であった。9月21-23日にモスクワの科学アカデミー世界文学研究所で開かれた第七回国債プラトーフ会議で、野中進(代表者)はソ連時代の作家アンドレイ・プラトーフについて報告を行い、ロシアとそれ以外の国々の研究者と研究交流を行った。これは本プロジェクトの第4の領域「文学の社会的機能」に関わるものである。2010年3月4-5日には、ソウルで第二回東アジア・スラヴィスト会議が開かれた。そこでは野中進(代表者)と中村唯史(分担者)がそれぞれ報告を行い、韓国、中国、ロシアなどの研究者との研究交流を行った。

(3) 2010年度については以下のとおりである：今年度は本研究プロジェクトの最終年度であるため、本研究の総括と成果報告のための作業を中心とした。まず、7月にストックホルムで開かれた第8回ICCEES世界大会でのセッション「ロシアの記号論的伝統：東と西からの視点(Semiotic Tradition in Russia: Perspectives from East and West)」を組織・開催した。野中進(研究代表者)はセッションの司会とコメンテータをつとめ、貝澤哉(研究分担者)と中村唯史(研究分担者)は報告を行った。また、本研究のアウトリーチ(社会還元的発信)活動として、野中進が編者の一人となって『現代ロシア文化論集(仮題)』の執筆・編集作業を行った。2011年中に東洋書店から出版の予定である。

(4) 以上のように、三年間を通じて計画的かつ積極的な研究を進め、それにふさわしい成果を挙げられたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

1. 野中進, まなざしと声: アンドレイ・プラトーフ作品のもう一つの精神分析的読解【原文ロシア語】, *Acta Slavica Iaponica*, 29, 2011, 87-102, 査読有.
2. 野中進, 書評論文 Galin Tihanov ed. *Gustav Shpet's Contribution to Philosophy and Cultural Theory*, West Lafayette: Purdue UP, 2010. 『ロシア語ロシア文学研究』43, 2011, 印刷中、査読有.
3. 中村唯史, トルストイ『戦争と平和』における「崇高」の問題、山形大学人文学部研究年報、8号、2011年3月、113-143、査読有.
4. 野中進, 他人の手紙への注釈: ローザノフのメディア的対話性の手法【原文ロシア語】, *Acta Slavica Iaponica*, 27, 2010, 125-138, 査読有.
5. 中村唯史, ソ連における翻訳の問題に寄せて: ガムザトフの詩『鶴』の再考まで, 『辺境と異境—非中心におけるロシア文化の比較研究』, 1, 2010, 18-35, 査読なし
6. 野中進, トゥイニャーノフの「意味の意味」, 研究成果報告書『ロシア・フォルマリズム再考: 新しいソ連文化研究の枠組における総合の試み』, 2008, 7-35, 査読なし.
7. 貝澤哉, なめらかな皮膚の裂けるとき—『ヤング・アグレッシヴ』におけるイメージと暴力性, 『ヤング・アグレッシヴ—ロシア現代芸術に於ける挑発的なスピリット』武蔵野美術大学美術資料図書館, 2008, 36-41, 査読なし
8. 中村唯史, 特権的トポスのはじまり: コーカサス表象の原型と「他者の声」について, 前田弘毅編『多様性と可能性のコーカサス: 民族紛争を超えて』(北海道大学出版会), 2008, 155-183, 査読有

[学会発表] (計 4 件)

1. NAKAMURA Tadashi, Before an Unknowable Current: Boris Eikhenbaum's Perception of History, ICCEES VIII World Congress, 2010年7月26-31日、於スウェーデン王国ストックホルム市.
2. KAIZAWA Hajime, P.A.Florensky's Idealistic-Materialistic Concept of

Icon: Image as Non-representation, ICCEES VIII World Congress, 2010年7月26-31日、於スウェーデン王国ストックホルム市.

3. NONAKA Susumu, まなざしと声: プラトーフの『ウーリャ』と『父の声』【原文ロシア語】, 第七回国際プラトーフ会議, 2009年9月23日, ロシア科学アカデミー世界文学研究所 (モスクワ)
4. NONAKA Susumu, 他人の手紙への注釈: ヴァシーリー・ローザノフのメディア的対話性の手法【原文ロシア語】

[図書] (計 1 件)

貝澤哉 『引き裂かれた祝祭』論創社、2008.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野中進 (NONAKA SUSUMU)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号: 60301090

(2) 研究分担者

貝澤哉 (KAIZAWA HAJIME)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号: 30247267

中村唯史 (NAKAMURA TADASHI)

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：20250962
(H20, 21→H22：連携研究者)

(3)連携研究者

長谷川章 (HASEGAWA AKIRA)
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号：60250867

武田昭文 (TAKEDA AKIFUMI)
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：70303203